

短 報

認定看護師教育課程修了者の動向調査

西村恵理奈¹⁾ 竹森 志穂¹⁾ 桑原 良子²⁾
 青野 真弓²⁾ 平良 智子³⁾ 山田 雅子¹⁾

Trend Survey among Nurses Who Completed a Certified Nurse Course as Appraisal of Their Roles and Future Education

Erina NISHIMURA¹⁾ Shiho TAKEMORI¹⁾ Yoshiko KUWABARA²⁾
 Mayumi AONO²⁾ Tomoko TAIRA³⁾ Masako YAMADA¹⁾

〔Abstract〕

A trend survey using a questionnaire was conducted among 651 nurses who completed the Certified Nurse Course provided by the Education Center at St. Luke's International University to understand the roles of nurses in their workplace and to obtain suggestions for improving the course. The number of responders were 180 (27.8%), of whom 176 continued to work as certified nurses in their specialized fields. The nurses learned "nursing practical ability in their field" and "methods of multioccupational cooperation" in the course. Approximately 124 responders (70%) answered that they actively play their roles as certified nurses in their workplace. As a result, "the patient's quality of life has improved," "the number of professionals who come to consult has increased," and "communication among multioccupations has become better." In addition, more than 114 (60%) of the respondents have earnestly continued learning and working. Learning was achieved through "self-learning of specialized knowledge and skills in their field" and "participation in academic meetings." Working was achieved through "collaboration with multioccupations" and "providing education and extension activities in their field." After the course, there were many requests for workshops and exchange meetings for continued collaboration.

〔Key words〕 Certified Nurse, Infertility Nursing, Cancer Chemotherapy Nursing, Visiting Nursing, Dementia Nursing

〔要 旨〕

本学教育センター生涯教育部認定看護師教育課程を修了した651名を対象に、無記名の web アンケートを用いて動向調査を実施した。回答数は180名（27.8%）であり、このうち176名は、所属機関において認定看護師としての活動を継続していた。在学中に習得したことでは、患者に対する看護実践能力や多職種連携の方法に関する回答が多かった。また、回答者の約7割が認定看護師として役割を発揮していると答え、所属機関にもたらしている効果では、「患者のQOLが改善している」「相談に来る専門職者が増えた」「多職種間のコミュニケーションが円滑になった」の割合が高かった。さらに、6割を超える回答者が、修了後も専門分野の知識・技術に関する自己学習や学会への参加といった活動を継続しており、所属機関においては多職種連携や専門分野の教育・普及活動といった取り組みを行っていた。本学に求めることとし

-
- 1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
 2) 聖路加国際大学教育センター・St. Luke's International University, Education Center
 3) 聖路加国際大学大学事務部・St. Luke's International University, Academic and Student Administration

受付 2020年10月20日 受理 2020年11月9日

て、研修会や交流の場の確保に関する希望が多かった。

【キーワード】 認定看護師教育機関、不妊症看護、がん化学療法看護、訪問看護、認知症看護

I. はじめに

少子高齢化が進む我が国において、看護師は、健康問題や社会の動向をグローバルに捉え、科学的根拠を集積し、さらには市民との良好なパートナーシップを築くことができる存在として期待されている。聖路加国際大学教育センターでは、様々な機関で活躍する看護師を対象に、実践と教育とをつなぐキャリア開発プログラムを提供してきた。

その一つに、日本看護協会が定める認定看護師教育機関の認定を受け開設した、不妊症看護コース、がん化学療法看護コース、訪問看護コース、認知症看護コースがある（これらを合わせて認定看護師教育課程という）。本課程の大きな特徴は、学内教授がコース責任者を担うことである。これにより、各分野の最新の知識や技術を、研修生にタイムリーに提供してきた。他にも、在学中は図書館機能を有する本学学術情報センターを開放することにより、学習支援の充実を図っている。2019年3月時点での修了生は、4コースあわせて651名に達した。

本研究では、修了生の動向を知るため、認定看護師教育課程の修了生651名を対象に、無記名のwebアンケート調査を実施した。この結果から、認定看護師教育課程の改善にむけた具体的な示唆を得たい。

II. 調査方法

1. 対象者

2019年3月までに本学認定看護師教育課程の4コースを修了した651名の中で、本研究の趣旨を理解し同意が得られた者を対象とした。コース別の開講年度と修了生の累計を、表1に示した。4コースのうち、不妊症看護コースとがん化学療法看護コースについては、それぞれ2019年度および2015年度以降、休講となっている。

2. 調査期間

2019年12月16日～2020年1月15日

3. 調査方法と質問内容

1) 調査方法

オンラインアンケートツール Survey Monkey を使用し、無記名のアンケート調査を実施した。リクルートは、各コースの修了年度ごとの代表者に研究参加の依頼とwebアンケートのURLをメールで送付し、全修了生への周

知を依頼した。

2) 質問内容

質問内容は、①回答者の属性、②認定看護師教育課程で習得したこと、③所属機関における認定看護師としての役割発揮状況、④所属機関にもたらしている効果、⑤修了後に継続している学習や取り組み、⑥本学に望むことの6つとし、①③④については選択式、②⑤⑥については自由記載とした。

4. 倫理的配慮

対象者には、メールで調査の趣旨について説明した。その際、参加は対象者の自由意思によって決定され、同意しない場合であってもいかなる不利益も被らないこと、調査は無記名であり、個人が特定されるような記載をしないこと等を明記した。また、研究の同意はwebアンケートへの回答をもって得るものとし、無記名のため、提出後の同意撤回は出来ないことを記載した。本調査は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号【19-A073】）。

III. 結果

1. 対象特性と回収率

651名の対象者のうち、180名から回答を得た（回答率27.8%）。コース別の内訳は、不妊症看護コース38名（回答率29.7%）、がん化学療法看護コース29名（回答率17.1%）、訪問看護コース57名（回答率23.6%）、認知症看護コース56名（回答率50.5%）であった（表2）。

現在の職位としては、スタッフが最も多く、次いで主任相当、師長・所長の順であった。その他には、教育担当や代表取締役、助産院院長、事務局長などを含み、離職中は4名であった。

コース別でみると、不妊症看護コースならびに認知症看護コースでは、スタッフとして勤務する者が多く、がん化学療法看護コースは主任相当、訪問看護コースは師長・所長が多かった。

また、現在の所属機関については、175名が回答した。病院が最も多く82名、次いで訪問看護事業所46名、がん診療連携拠点病院20名、診療所（不妊治療専門のクリニックを含む）12名の順であった。他にも、介護・福祉施設や企業に所属している者がいた（図1）。

2. 認定看護師教育課程で習得したこと

「認定看護師教育課程を受講して、何が身につきましたか」という設問に自由記載で回答を求めたところ、177名から292件の記述を得た。それらを類似した内容ごとにまとめ、9項目に分類した(図2)。最も多かった回答は、患者に対する看護実践能力に関すること(103件)であり、「専門分野に関する正しい知識や技術を学んだ(がん化学療法看護コース)」「対象となる患者の特性や思いを理解した(認知症看護コース)」といった内容があった。

続いて多かった項目は、多職種連携の方法に関する記載(54件)であり、「多職種とのコミュニケーションの取り方を学んだ(がん化学療法看護コース)」や「他職種と円滑に協働を続けていく上での課題を知り、認定看護師としてできることを考えることができた(訪問看護コース)」といったものがあった。

3つめは、自己研鑽・自己啓発能力に関する内容(28件)であり、「学び続けることの大切さを学んだ(訪問看護コース)」「主体的に行動をとれるようになった(認知症看護コース)」といった記載があった。

続いて、患者アセスメント能力および言語化と発信する力に関する内容が、同数で27件であった。前者では、「疾病だけでなく、患者と家族を全人的に捉えアセスメントする力がついた(訪問看護コース)」「筋道を立てて考え、多角的に物事を捉えられるようになった(認知症看護コース)」といった記載があり、後者では、「言語化す

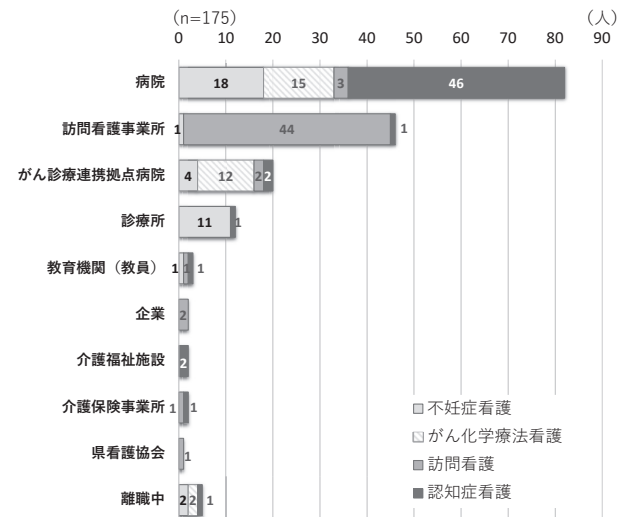


図1 現在の所属機関

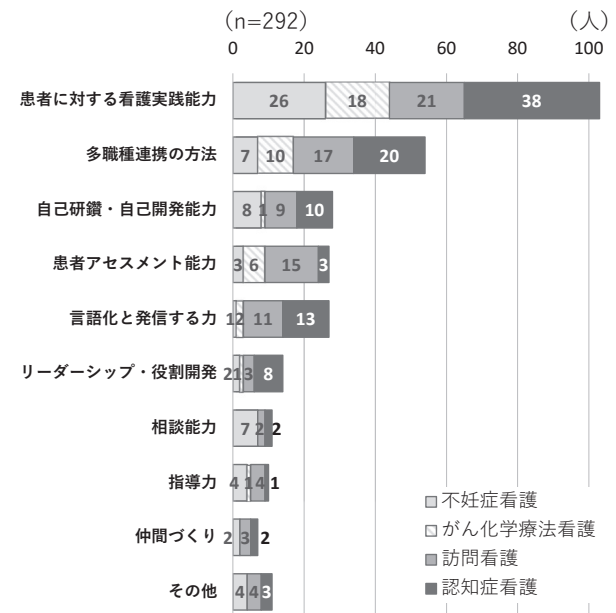


図2 認定看護師教育課程で習得したこと

表1 コース別の開講年度と修了者数

コース名	開講年度	修了者数
不妊症看護看護	2008～2018年度	128名
がん化学療法看護	2008～2014年度	170名
訪問看護	2008年度～現在	242名
認知症看護	2015年度～現在	111名

計 651名

表2 回答者の特性

	回答数 (回答率)	職位 (人)				
		スタッフ	主任相当	師長所長	その他	不明
不妊症看護	38 (29.7)	20	6	5	6	1
がん化学療法看護	29 (17.1)	9	14	2	4	0
訪問看護	57 (23.6)	18	3	28	5	3
認知症看護	56 (50.5)	25	20	4	5	2
合計	180 (27.8)	72	43	39	20	6

ることで自分の曖昧な知識や考えが明らかになった（訪問看護コース）」「認知症者の行動の意味を言葉で表現すること（認知症看護コース）」といった記述があった。後者に関する回答は訪問看護コースと認知症看護コースに集中し、他2コースからの回答は3件であった。

一方、相談能力と指導力に関することは、それぞれ10件程度であった。記述内容としては、「スタッフだけでなく患者からの相談にも役立っている（不妊症看護コース）」や「教育のポイントがわかった（訪問看護コース）」などがあった。その他、「文献検索の方法を学んだ（不妊症看護コース）」「情報収集能力が上がった（がん化学療法看護コース）」という記載があった。

3. 所属機関における認定看護師としての役割発揮状況

「所属機関において認定看護師として役割を発揮していると感じますか」という設問に対し、177名から回答を得た。そのうち、17名が「大いに発揮している」、107名が「発揮している」と回答し、これらを合計すると全体の70.0%であった（図3）。

コース別でみると、「大いに発揮している」「発揮している」の割合が最も多かったのは、がん化学療法看護コースであり、82.7%であった。一方、最も少なかったのは認知症看護コースで、60.5%であった（図4）。

4. 所属機関にもたらしている認定看護師の効果

「あなたの存在が、所属機関に効果をもたらしていると感じていますか」という設問に選択式で回答を得た。内容は図5に示す11項目とし、「とても感じる」「感じる」「あまり感じない」「感じない」の4件法とした。

169名から回答を得た。全コースの集計で「とても感じる」または「感じる」とした回答が多かったものは、「患者のQOLが改善している」「相談にくる専門職者が増えた」「看護のレベルがアップした」「看護の研究が増えた」「多職種間のコミュニケーションが円滑になった」の4項目であった。一方、「患者・利用者からのクレームが減った」「残業が減った」「患者・利用者が増えた」「退職する看護師が減った」「地域医療に貢献している」については、「あまり感じない」「感じない」と答えた割合が半数を超える結果となった。

コースによって傾向がわかれた項目として「看護の研究が増えた」があり、不妊症看護コース、がん化学療法看護コース、訪問看護コースの3コースで、「とても感じる」と「感じる」と答えた割合が35%未満であったのに対し、認知症看護コースは61.5%と高値であった。他にも、「患者・利用者が増えた」では、不妊症看護コースとがん化学療法看護コースで「とても感じる」「感じる」の割合が半数を上回ったのに対し、訪問看護コースと認知症看護コースでは半数を下回り、特に認知症看護コースでは16.4%と特に低かった。さらに、「地域医療に貢献し

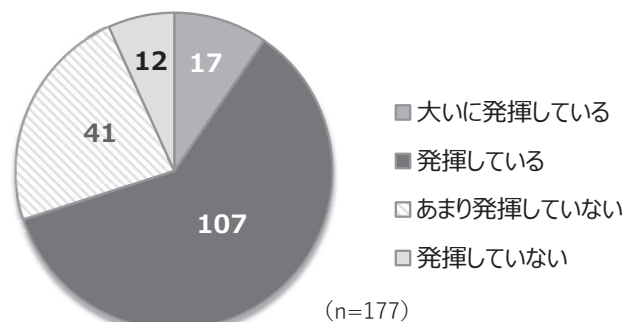


図3 認定看護師として役割を発揮している（全コース）

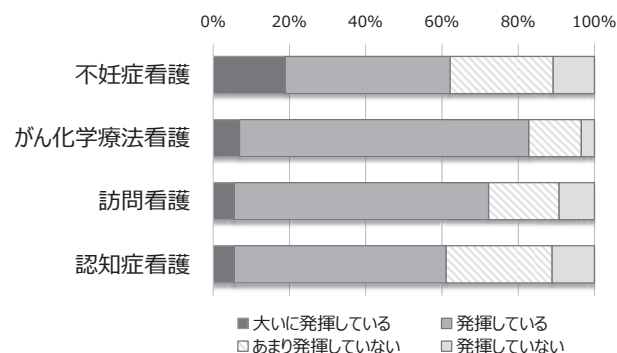


図4 認定看護師として役割を発揮している（コース別）

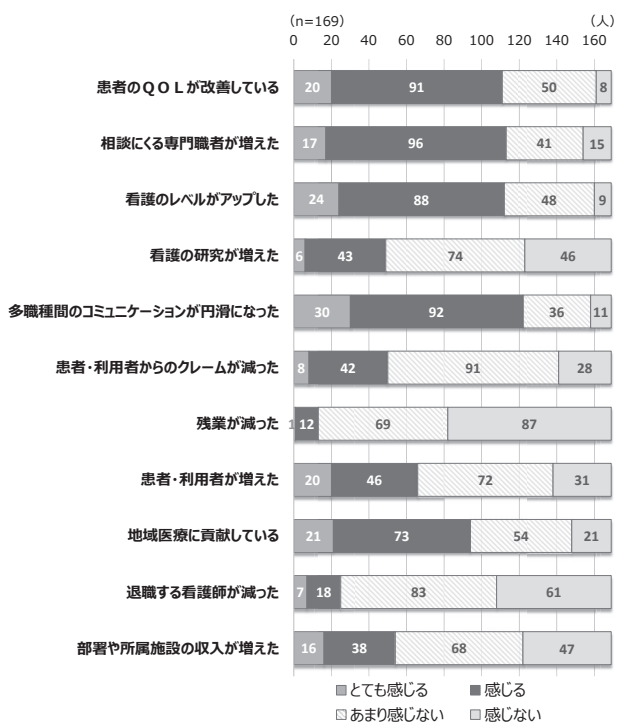


図5 所属機関にもたらしている効果（全コース）

ている」では、訪問看護コースの「とても感じる」「感じる」の割合が8割を超え、他のコースと比べ際立って高かった。

5. 修了後に継続している学習や取り組み

「修了後も続けている学習活動」および「修了後に意図的に取り組んでいること」の有無を調査し、「ある」と回答した場合は具体的な内容を自由記載で求めた。

「修了後も続けている学習活動」では、180人中114名(63.3%)が「ある」と回答し、そのうちの101名からのべ114件の具体的記述を得た。

内訳は、専門分野の知識・技術に関する自己学習が最も多く、全コース併せて43件であった(図6)。続いて学会や研修会への参加に関する内容が28件、資格取得や進学に関することが16件であった。資格取得や進学の中には、特定行為研修の受講5名、大学院への進学5名、認定看護管理者教育課程の受講3名が含まれた。

「修了後に意図的に取り組んでいること」では、180名のうち128名(71.1%)が「ある」と回答し、そのうちの113名からのべ115件の具体的記述を得た。

その内訳は、多職種や地域との連携推進に関することが最も多く26件、次いで専門分野の教育・普及活動(24件)、所属機関での役割開発(22件)、患者に対する直接的なケア(20件)であった(図7)。

多職種や地域との連携推進に関することでは、「インターネットを介した相談(不妊症看護コース)」「薬剤師との情報共有や連携の強化(がん化学療法看護コース)」「県内で働く認定看護同士の連携の場づくり(訪問看護コース)」「院内スタッフを巻き込んでアクティビティを行う(認知症看護コース)」などがあつた。

専門分野の教育・普及活動については、所属機関における研修会の企画・運営に加え、外部での講演活動や研修会の開催などが含まれた。

所属機関での役割開発については、「不妊相談室を設置した(不妊症看護コース)」や「院内のマニュアルづくり(がん化学療法看護コース)」「在宅復帰にむけて重要な情報や資源を整理すること(訪問看護コース)」「院内デイケアを立ち上げた(認知症看護コース)」などがあつた。

6. 本学に望むこと

認定看護師の活動を充実させるために本学に望むことについて、自由記載で回答を得た。その結果、131名から回答が得られ、のべ147件であった。それらを類似する内容ごとに整理したところ、図8に示す8項目となった。研修や交流の場の確保に関する記述が特に多く(81件)、「セミナーを開催して欲しい」「認定看護師同士が集まる場が欲しい」といった記述があつた。

次いで、コースの再開・継続を求める内容が12件あつた。この中には、現在休講となっている不妊症看護コースからの回答が10件、がん化学療法看護コースからの回答が1件含まれていた。

その他、「所属機関や地域で教育活動を行う際の物資の

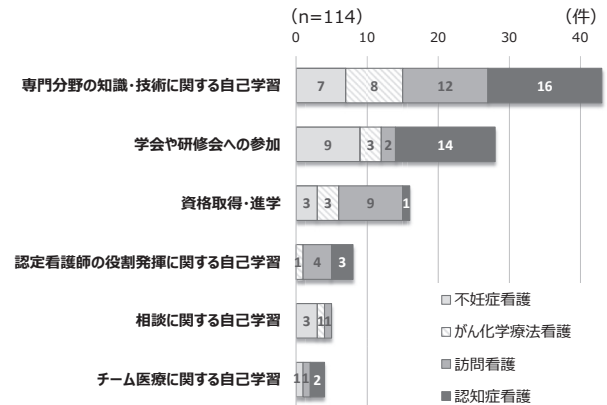


図6 修了後も継続している学習活動

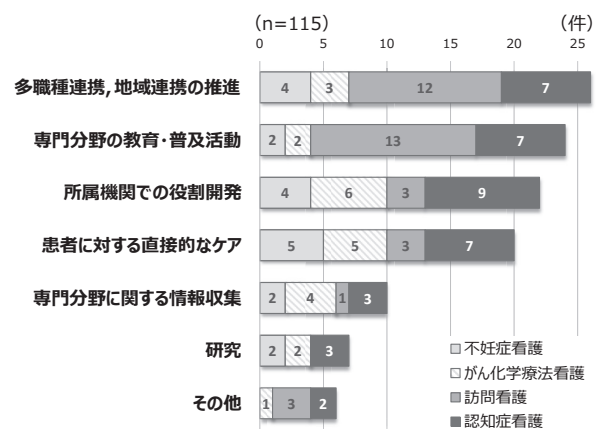


図7 修了後に意図的に取り組んでいること

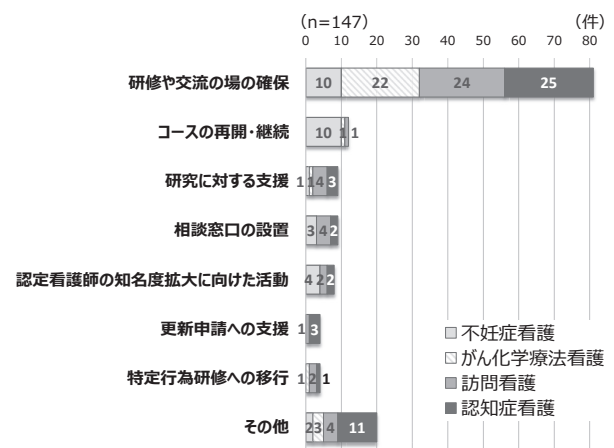


図8 本学に望むこと

貸出」や「図書館の継続利用」といった内容があつた。

IV. 考 察

今回の調査では、回答者の多くが、それぞれの認定看護分野において、認定看護師としての活動を継続してい

ることが分かった。本学教育センターについて、松谷らは、「センターでは、関連知識を系統的に効率よく学んで知識基盤を作る。しかし、実践の現場では、それらを基盤にさらに知識を得る必要が出てくる」としたうえで、「当該センターが提供するコースは、(中略)その分野の専門職者として自己啓発を行いながら、日進月歩の医療について知識や技術を批判的に取り入れ、実践に応用できる実践者となることを目指している¹⁾」と述べている。今回の結果は、修了生の多くが、所属機関において継続的に自己啓発を積んでいることを示しており、本学の目指してきた姿を反映したものであると考えた。

一方、認定看護師教育課程は、日本看護協会が定める認定看護師教育機関の認定に基づいており、同協会は、認定看護師の担う役割として実践・相談・指導の3つを提示している。この3つの役割から本調査を振り返ると、在学中に習得したこととして看護実践能力をあげる回答が多かったのに対し、相談能力と指導力は、看護実践能力の10分の1程度であった。このことから、多くの研修生は、在学中に実践の能力を獲得したと実感する一方で、相談と指導については十分な実感に至っていない可能性があると推察した。

この理由を、日本看護協会が定める認定看護師教育基準カリキュラムの規定²⁾をもとに考察した。当該規程において、認定看護師教育課程にかかる全615時間のうち、演習・実習を除いた時間数は345時間である。この中で、相談と指導に該当するものは、それぞれ15時間(5コマ相当)であり4.3%に過ぎない。本学では、この限られた時間の中で、ロールプレイや模擬授業などを取り入れることで、効果的な学びを模索してきた。しかし、15時間では十分な能力を獲得したと実感することは難しく、在学中の実習において相談や指導に関する役割発揮に苦む研修生もいる。

翻って、修了後の活動についてみると、「所属機関にもたらす効果」や「修了後に意図的に取り組んでいること」に関する回答の中に相談や指導に関するものが多く含まれており、これらに対する所属機関のニーズや期待がみてとれた。今回の調査が本課程修了時と現在の能力を比較するものではないため、修了生の能力の推移については言及できない。しかしながら、修了生はこのような状況に対応すべく、研鑽を積んでいる可能性があることが示唆された。

以上のことから、相談および指導に関する今後の方向性を検討した。本調査では、在学中の習熟度や具体的な改善案については聴取していない。そのため、まずは研修生や修了生とともに教育課程を振り返り、相談や指導に関する教育方法の在り方について検討する。また、本

学に望むこととして、研修会や交流の場の確保に関する記述が多数であったことから、修了生を対象とした研修会に相談や指導の要素を組み込むことで、修了生のニーズにあった継続的な支援を提供できる。これにより、認定看護師の持続的な能力向上に貢献できると考えた。

認定看護師教育課程修了生の動向を調査したことにより、修了生の活動の現状と、認定看護師教育課程の改善にむけた課題を見出すことができた。今回の結果を踏まえ、新しい教育体制の構築に向けさらに検討していく。

V. 結 語

今回の調査では、回答者180名のうち176名が、それぞれの認定看護分野において、認定看護師として活動を継続していることが分かった。認定看護師教育課程において身につけたこととしては、患者に対する看護実践能力や多職種連携の方法に関することが多かった。また、回答者の7割が、現在認定看護師として何らかの役割を發揮していると答え、所属機関にもたらしている効果としては、回答者の半数以上が「患者のQOLが改善している」「相談に来る専門職者が増えた」「看護のレベルがアップした」「多職種間のコミュニケーションが円滑になった」と感じていた。一方で、「残業が減った」や「退職する看護師が減った」については、「あまり感じない」「感じない」とした回答が8割を超えた。

修了後も続けている学習や取り組みについては、6割を超える回答者が「ある」と応え、専門分野の知識・技術に関する自己学習、学会や研修会への参加、多職種や地域との連携、専門分野の教育や普及活動といった内容があった。本学に求めることでは、回答者の多くが、修了後の研修会や交流の場の確保をあげた。

最後に、指導と相談に関しては、所属機関における認定看護師の役割期待が大きいものの、修了時に習得したという実感に至っていないという実態があることが示唆された。これについては、今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 松谷美和子, 森明子, 實崎美奈ほか. 聖路加看護大学看護実践開発研究センターにおける継続教育の現状と課題: 認定看護師(不妊症・がん化学療法館補・訪問看護)教育課程に焦点を合わせて. 聖路加看護大学紀要. 2012;(38):81-5.
- 2) 日本看護協会. 認定看護師教育期間審査要項: 特定行為研修を組み込んでいない教育課程(A課程教育機関). 公益社団法人日本看護協会: 2019.